

派遣者番号	30K01	氏名	須田 雅子		
研究主題 —副主題—	特別な支援が必要な児童の学習意欲を高める支援の在り方 — 授業のユニバーサルデザインと ARCS モデルを関連づけて —				
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	吉川 成司	長島 明純	三津村 正和
所属校	品川区立旗台小学校	校長	梶 千枝子		

キーワード：授業のユニバーサルデザイン、ARCS モデル、学習意欲

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

文部科学省（2012）は、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童の割合が、6.5%であることを示した。こうした児童には、授業において多くの困り感を抱え、学習意欲の低下といった課題が見られる。

近年、すべての児童が「分かる、できる」ように工夫配慮された通常の学級における授業デザインとして授業のユニバーサルデザイン（以下、授業UD）が注目され、特別な支援が必要な児童の授業への参加率の向上などが報告されている。今後、さらに授業UDを活用し、児童の学習意欲を高めていくには、授業づくりをする教師自身がその意味を理解した上で、有用性を生かしていく必要がある。

そこで本研究では、特別な支援が必要な児童の学習意欲を高める支援の在り方を考察していくことを目的とする。そのために、学習意欲を引き出すための動機付けモデルであるケラー（Keller, J.M）のARCSモデルを用いて、授業UDが理論的にどのように学習意欲に対して有効であるかを検証していく。

2 研究の内容・研究の方法

本研究では、先行研究や文献を調査し、以下の内容について整理した。また、授業UDとARCSモデルとの関連性を検証した。

（1）理論研究

特別な支援が必要な児童の学習意欲に関する課題を把握する。また、授業UDの支援方略と学習意欲の関連性を整理する。

（2）検証

授業UDとARCSモデルの関連性を検証する。また、授業UDの有用性と課題について、ユニバーサルデザイン化した授業案（2年生国語科「お手紙」）をARCSモデルの視点で検証する。

3 研究の結果と考察

（1）学習意欲に関する課題

発達障害のある児童の多くがワーキングメモリに課題を抱えていることが明らかになっている。学校での活動の多くは、複数の作業の組み合わせからなり、ワーキングメモリに課題のある児童にとっては、大きな負担である。そのため、活動に失敗することも多い（湯澤・湯澤, 2014）。こうした点から、授業など、様々な場面で、自信喪失や自己嫌悪を体験し、その積み重ねによって、学習意欲を低下させやすいと考えられる。そして、学習意欲の低下は、授業への参加態度や人間関係にも影響を及ぼすと考えられる。授業において、発達障害のある特別な支援が必要な児童の学習意欲をいかに高めるかは、大きな課題である。

（2）ARCSモデルと授業UDの関連性の検証

授業UDでは、授業のモデル図をピラミッド型の階層で表しており、各階層を「参加」「理解」「習得」「活用」としている。各階層での児童のつまずきを想定し、授業における支援方略として、焦点化、視覚化、共有化などが示されている（桂ほか, 2014）。

ARCSモデルとは、学習意欲を引き出すための動機付けをモデル化したもので、学習意欲を「注意(Attention)」「関連性(Relevance)」「自信(Confidence)」「満足感(Satisfaction)」の四つの概念に分類している。そして、その主な支援方略が示されている（ケラー, 2010）。ARCSモデルは、多数の研究プロジェクトや他の妥当性指標によって、その妥当性が実証されている。

ア ARCSモデルと授業UDの支援方略

ARCSモデルの支援方略と関連する授業UDの支援方略を、以下の表に整理した。

表1 ARCSモデルと授業UDの支援方略

下位分類	おもな支援方略	授業のユニバーサルデザイン
注意	A-1 知覚的喚起 学習者の興味をひくために何ができるか？ 新しいアプローチや個人的または感情的要素の注入により、好奇心と驚嘆を創出する。	視覚化 刺激量調整
	A-2 探究心の喚起 どうすれば探求的な態度を引き出せるか？ 質問をし、矛盾を創出し、探究心を持たせ、課題を考えさせることで好奇心を増す。	授業のしかけ
	A-3 変化性 どうすれば学習者の注意を維持できるか？ 発表スタイル、具体的に褒められるもの、興味をひく事例、予測しない事象により、興味の維持を図る。	共有化 身体性の活用(動作化、作業化)
関連性	R-1 目的指向性 どうすれば学習者のニーズを満たすことができるか？ このインストラクションが役に立つという記述や事例を提供し、ゴールを提示するか、あるいは学習者にゴールを定義させる。	焦点化 展開の構造化
	R-2 動機との一致 いつのようにして学習者の学習スタイルや興味と関連づけられるか？ 個人ごとの達成機会や協力的活動、リーダーシップの責任、そして積極的なロールモデルを提供することにより、教育を学習者の動機や価値の呼応するものにする。	共有化 クラス内の理解促進 ルールの明確化
	R-3 親しみやすさ どうすれば学習者の経験と授業を結びつけることができるか？ 学習者の仕事や背景と関連のある具体例や比喩を提供することにより、教材や概念をなじみのあるものにする。	スパイラル化
自信	C-1 学習要求 どうすれば成功の期待感を持つよう支援できるか？ 成功とみなすための要求事項と評価基準を説明することによって肯定的な期待感と信頼感を得る。	スモールステップ化
	C-2 成功の機会 学習経験がどのように自らの能力に対する信念を高めていくのか？ 多くの多様な・挑戦的な経験を提示することによって、自分の能力への信頼を高める。	共有化 スモールステップ化
	C-3 コントロールの個人化 成功の結果を自らの努力と能力によるものと認識できるか？ 個人的な制御(可能であればいつでも)提供する技法を用い、成功を個人の努力に帰属するフィードバックを提供する。	個別の配慮
満足感	S-1 自然の結果 どうすれば獲得した知識やスキルを活用する機会を提供できるか？ 個人的な努力と達成に対する肯定的な気持ち強化するようなフィードバックと他の情報を提供する。	通用化 機能化 共有化
	S-2 肯定的な結果 何が学習者の成功を強化するだろうか？ ほめ言葉、本当のまたは象徴的な報酬、おびき誘因をしようするか、または学習者自身に成功の報酬として彼らの努力の結果を提示させる。	クラス内の理解促進
	S-3 公平さ どうすれば学習者が公平に扱われていると感じるか？ パフォーマンス要求をあらかじめ述べた期待と一致させて、すべての学習者のタスクと達成に一貫した測定基準を使用する。	ルールの明確化

イ 関連性からの分析

授業UDモデル図からの支援方略14個のうち12個がARCSモデルと関連があった。さらに、授業のしかけや、個別の配慮といった支援方略も関連しており、授業UDの多くの支援方略が学習意欲を高める支援として有効であると考えられる。

特に共有化は、ARCSモデルの四つの分類すべてに関連があった。共有化とは、ペアやグループでの話し合いであるが、次のような要素がある。教師の話聞くだけの時間を減らし、授業での集中力を持続することができる。自分の考えを表明することができ、相手が自分の考えに興味をもってくれたと感じることもできる。また、全体発表の前にペアで話すことで、自分の考えに自信をもつことができる。鈴木(1995)は、学習意欲は、主観的な課題達成への見通し(期待感)と課題に取り組み、それを達成することがもつ意義(価値)との相乗作用であるというケラーの理論から、ARCSモデルの四つの分類のうち、その中核をなすものは「関連性(価値)」と「自信(期待)」であるとしている。つまり、この二つに関連している共有化は、学習意欲を高める支援として有効である可能性が高いと言える。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

刺激量の調整、クラス内の理解促進、ルールの明確化について、小貫(2014)は、児童が安心して授業に臨むことができ、学習理解につながるための基礎的環境整備であるとしている。これらは、ARCSモデルにおいて「関連性」や「満足感」と関連しているが、学習意欲という視点でも基礎的環境整備は重要な支援であると言える。

(3) 授業案の検証から

筆者が平成25年の研究授業で実践した第2学年国語科「お手紙」の授業UDをARCSモデルの視点で検証したところ、視覚化など「注意」に関する支援が多く、「満足感」に関する支援が少なかった。学習意欲は、「おもしろそうだからやってみよう」という興味・関心で終わってしまうのではなく、自信や満足感を感じて意欲を継続し、新たな課題への学習意欲につなげていくことが重要である。今後、授業をUD化した際は、支援方略がバランスよく設計されているかを点検することが必要である。

4 総合考察

本研究を通して、授業UDの支援方略は、特別な支援が必要な児童の学習意欲を高める支援として有効であることが明らかになった。しかし、これらの支援を単に取り入れれば良いのではなく児童の実態を把握し、目的や効果を理解した上で、適切に支援を用いているかどうか、授業デザインを常に点検していくことが重要である。さらに、ARCSモデルにおいて、教師による励ましや声の抑揚といった話し方も学習意欲を高める支援として有効であるとあった。授業UDにおいても、教師が児童の実態や授業での状態に応じて適切に関わる支援を意識していくことで、学習意欲を高める支援として更に有効になると考える。

5 今後の展望

特別な支援が必要な児童の学習意欲を高めるためには、授業UDの有用性を理解した上で、支援のバランスを点検し、適切に用いていく。また、授業UDを学習意欲の視点で効果的な支援方略にしていくためには、更なる理論的な裏付けをしていく必要がある。